

京大 広報

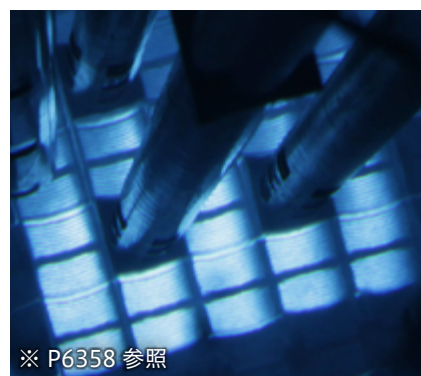
KYOTO UNIVERSITY



※ P6348 参照



※ P6350 参照



※ P6358 参照

2026.7
No. 789

目次

[大学の動き]

- 次期総長候補者に立川康人 副学長、工学研究科教授を選出 6348
- 理事が発令される 6350
- 理事補が発令される 6350
- 京都大学レクチャーシップアワード授賞式・記念講演会を開催 6350
- 国立研究開発法人物質・材料研究機構 (NIMS) との連携・協力に関する協定締結式を実施 6353
- パナソニックハウジングソリューションズ株式会社から洋式便器を寄贈 6353
- 公開講座 京大知の森 (令和8年度春季) を開催 6354
- 第6回現役留学生と卒業留学生が繋がる会「教えて先輩! 卒業後の進路、そのリアル」を開催 6356

[部局の動き]

- 京都大学研究用原子炉 (KUR) 運転終了、62年の歴史に幕 6358
- 医学研究科附属がん免疫総合研究センターが「がん免疫研究の最前線に触れる“未来のノーベル賞研究者を育む科学探究プログラム”」を開始 6359

[寸言]

- 京大卒の若手諸君、真価を発揮せよ!
石田 健一郎 6360

[随想]

- 適正な動物実験の推進と科学技術の発展
名誉教授 高田 昌彦 6361

[洛書]

- 線を引く 木村 里子 6362



京都大学

所属・職名については、行事開催時点のものです。

大学
の
動き

次期総長候補者に立川康人 副学長、工学研究科教授を選出

現総長の任期満了(9月30日)に伴う次期総長候補者の選考が行われ、6月16日に開催した総長選考・監察会議において、立川康人 副学長、工学研究科教授を選出しました。



総長選考・監察会議では、教育研究評議会から推薦された学内予備候補者15名について、提出された所信表明書などを総合的に勘案して、「望まれる総長像」に

ふさわしいと考えられる第一次総長候補者を6名選考しました。その後、第一次総長候補者について、総長選考・監察会議所定の面接調査(共通質問・自由質問を含む)を行いました。また、面接調査での候補者の所信表明と共通質問への回答の様子について録画をして学内に公表し、学内の意向調査を実施しました。

そして、総長選考・監察会議では、学内の意向調査の結果を尊重したうえで、所信表明書などおよび面接調査の結果を勘案し、6名の候補者について個別の検討を行いました。その結果、複数名に対し再度面接調査を実施し、どの候補者が「望まれる総長像」に最もふさわしいと考えられるかに関して慎重に審議を重ねた結果、全会一致で総長候補者を決定しました。

任期は令和8年10月1日から令和14年9月30日まで。

総長候補者の選考状況

1. 総長候補者

立川康人(副学長、工学研究科教授)

〔総長候補者選考理由〕

同氏は、工学研究科長として現場の運営を統括し、副学長(京大将来ビジョン担当)や理事補(国際担当)などの全学的なポストを歴任し、国際卓越研究大学構想を現場でいかに進めるべきかを熟知している。当該構想の中核であるデパートメント制への円滑な移行に向けて、学部教育のあり方を含む具体的な方策を構想している。新たな教育・研究の基盤を形成するとともに、安定的かつ持続可能な大学の基盤を創出する意向を表明している。そして、現在の京都大学の状況下において、自由の学風のもと、対話を重視したリーダーシップにより、国際卓越研究大学としての変革を安定的かつ強力に牽引することが期待できる。

同氏は、総長選考・監察会議が策定した「望まれる総長像」で求めている意志、資質、能力を備えている。京都大学が掲げる国際卓越研究大学構想の達成のための実行力を有し、世界をリードする大学としての地位を確立するトップリーダーにふさわしいと判断した。

以上により、全会一致で第28代京都大学総長候補者として決定した。

2. 第一次総長候補者(五十音順)

浅野耕太(人間・環境学研究科教授)

江上雅彦(理事、副学長)

榎本哲夫(理事、副学長)

田尾龍太郎(農学研究科長)

大学の
動き

立川康人（副学長、工学研究科教授）

波多野悦朗（医学研究科長）

〔選考理由〕

各候補者の所信表明書等に基づき、「望まれる総長像」に相応しいと考えられる候補者を第一次総長候補者として6名選考した。

これらの候補者は、京都大学の総長候補者として以下の選定理由を満たしていると判断された。

- 1) 所信表明において示された将来のビジョンと戦略がすぐれている
- 2) 京都大学の総長として相応しい人格、学識及び国際的な視野を備えている
- 3) 学内外の関係者と確固たる信頼関係を築き、京都大学のリーダーとして大学を導いていくための資質を備え、かつ、それを十全に発揮することができる
- 4) 国内外の教育研究分野に関する深い知識と将来展望の洞察力を持ち、本学の教育研究力を効果的に高めるためのマネジメント能力を備えている
- 5) 国内外の関係者とのネットワークを構築・維持する能力、社会の状況を把握して迅速かつ的確に対応する企画力を備えている
- 6) 国際卓越研究大学としての改革を実行する強い意志と実行力を備えている

※総長選考・監察会議による学外候補者の推薦はなかった。

3. 総長選考日程

令和8年4月 6日	選考日程の公示
4月 6日～5月11日	総長選考・監察会議委員による学外候補者の推薦期間
4月23日	教育研究評議会による予備候補者の推薦
5月25日	第一次選考の実施
6月 1日	第一次総長候補者への面接調査の実施
6月15日	意向調査の実施
6月16日	第二次選考の実施（面接調査の実施を含む） 総長候補者の決定

4. 立川康人 副学長、工学研究科教授の略歴

1987年 3月24日	京都大学工学部 交通土木工学科卒業
1989年 3月23日	京都大学大学院 工学研究科修士課程 交通土木工学専攻修了
1996年 1月23日	博士（工学）の学位授与（京都大学 論工博3064号）
1989年 4月 1日	大阪ガス株式会社（1990年8月31日まで）
1990年 9月 1日	京都大学助手 工学部土木工学科（1996年3月31日まで）
1996年 4月 1日	京都大学助教授 防災研究所（2007年3月31日まで）
2007年 4月 1日	京都大学准教授 大学院工学研究科（2013年10月15日まで）
2013年10月16日	京都大学教授 大学院工学研究科（現在に至る）
2014年11月 4日	京都大学理事補（国際担当）（2020年3月31日まで）
2023年 4月 1日	京都大学工学研究科長、工学部長、副理事（2026年3月31日まで）
2026年 4月 1日	京都大学副学長（京大将来ビジョン担当）（現在に至る）

（総務室）

[目次に戻る](#)

大学の
動き

理事が発令される

7月1日付けで理事が任命されました。任期は令和8年9月30日まで。



総務・労務・評価・IR・
危機管理担当
吉田 光成（再任）

[目次に戻る ↗](#)

理事補が発令される

補佐する理事	氏 名	任 期	
総務担当理事 学生担当理事	安 田 拓 人	【総務】令和8年 7月1日～令和8年9月30日 【学生】令和7年10月1日～令和8年9月30日	（再任）
労務担当理事	島 田 裕 子	令和8年7月1日～令和8年9月30日	（再任）

[目次に戻る ↗](#)

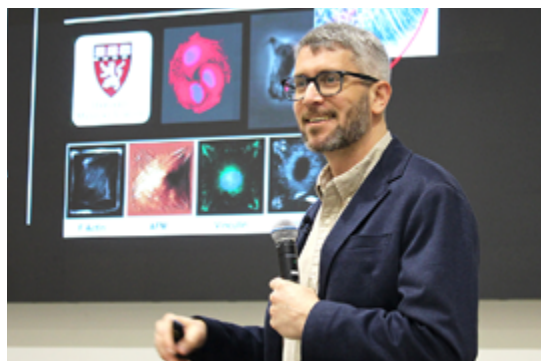
京都大学レクチャーシップアワード授賞式・記念講演会を開催

2026年4月16日（木）、京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて、「京都大学レクチャーシップアワード2025 [医学・生命科学分野]」授賞式および記念講演会を開催しました。

本アワードは2025年に本学で創設された国際学術賞で、スポンサー企業の支援を得て実施されており、将来の学術を切り拓く卓越した研究者を顕彰し、その知見を広く共有することを目的としています。

本年度の受賞者であるプリンストン大学のクリフォード・ブラングウィン博士を京都に迎え、多くの研究者・学生が参加する中、記念すべき初回の授賞式が執り行われました。

授賞式に先立ち、前日には京都大学の若手研究者・学生を対象とした交流イベントが開催され



若手交流会でメッセージを伝えるブラングウィン博士



若手交流会で会話を楽しむブラングウィン博士

大学の
動き



京都大学交響楽団による室内楽の演奏



ブラングウィン博士への授与の様子

ました。本イベントでは、ブラングウィン博士がこれまでの研究キャリアや着想の源について語るとともに、「良い研究課題の見つけ方」や「研究者としての進路選択」といったテーマについて、自身の経験を交えながら講演を行いました。参加者からは多くの質問が寄せられ、活発な議論が展開されるなど、次世代研究者にとって大きな刺激となる機会となりました。

授賞式は、京都大学交響楽団による室内楽の演奏に続いて開会し、総長をはじめ、大学執行部および選考委員の出席のもと執り行われました。開会にあたり、湊 長博 総長より挨拶があり、本アワード創設の趣旨と意義が述べられました。続いて、選考委員長である斎藤通紀 高等研究院教授より、受賞者の紹介が行われました。

その後、北川 進 研究推進担当理事の立ち会いのもと、湊総長よりブラングウィン博士へ「京都大学レクチャーシップアワード2025 [医学・生命科学分野]」が授与されました。

授賞式に続いて行われた記念講演会では、斎藤教授の司会のもと「Liquid-liquid phase separation in cell physiology and disease」をテーマに、ブラングウィン博士が講演を行いました。講演では、細胞内における分子の自己組織化の原理として液-液相分離 (LLPS) が紹



斎藤教授による司会



記念講演を行うブラングウィン博士



記念講演会の様子



質問に答えるブラングウィン博士

大学の
動き

介され、細胞を動的かつ流動的なシステムとして捉える新しい生命観が提示されました。また、この現象が遺伝子発現制御や疾患の理解にどのように関わるかが示され、生命科学における重要性が強調されました。

続いて行われたセッションでは、林 康紀 医学研究科教授が座長を務め、本学の若手研究者4名が最先端の研究成果を発表しました。

- 下林俊典 iPS細胞研究所准教授

Supramolecular protein block copolymers encode presynaptic active zone nanolattices

- 細川智永 医学研究科准教授

Inducible Condensates Provide a Tunable Platform for Spatiotemporal Protein Integration

- 古川亜矢子 農学研究科准教授

Understanding the Dynamic Structural Unit of Heterochromatin Protein 1 α (HP1 α) in Phase Separation

- 山野隆志 生命科学研究所准教授

The Pyrenoid: A Phase-Separated CO₂-Concentrating Organelle and Regulatory Hub

分子生物学から神経科学、植物科学に至るまで、相分離を軸とした本学内の複数分野にまたがる研究が紹介され、LLPS研究が学内で広く展開されていることが示されました。

最後に、榎木哲夫 京都大学国際交流担当理事より閉会挨拶が行われ、本アワードが、国際的な研究者交流のハブとして機能するとともに、次世代研究者の育成につながることへの期待が示されました。

プログラム終了後にはレセプションが開催され、受賞者、学内研究者、来賓などが一堂に会しました。レセプションでは、在大阪・神戸米国総領事館広報部長より挨拶があり、日米間の学術交流への期待が示されました。参加者はリラックスした雰囲気の中で交流を深め、今後の共同研究やネットワーク形成につながる機会となりました。

本アワードは、優れた研究者を顕彰するのみならず、その知見に直接触れる機会を提供することで、新たな学術的挑戦を促す場として位置付けられています。今後も本取り組みを通じて、分野や国境を越えた学術交流を促進し、未来の科学を担う人材の育成に貢献していきます。



登壇した若手研究者とブラングウィン博士



ワリド・ザファル 在大阪・神戸米国総領事館広報部長による挨拶

(総合研究推進本部)

[目次に戻る](#)

大学の
動き

国立研究開発法人物質・材料研究機構（NIMS）との連携・協力に関する協定締結式を実施

本学は、2026年6月4日（木）、国立研究開発法人物質・材料研究機構（NIMS）と物質・材料科学分野における連携・協力に関する協定を締結し、百周年時計台記念館国際交流ホールにて協定締結式を行いました。

本協定に基づく具体的な連携として、以下の4点に重点的に取り組みます。

1. 研究者のクロスアポイントメントによる新領域開拓のための共同研究の推進
2. NIMSの「若手国際研究センター（ICYS）」フェロー制度等の活用による若手研究者の流動性拡大と自律的なキャリアパス形成支援
3. 技術職員や研究開発マネジメント人材の交流と育成による研究支援体制の高度化
4. 将来的なNIMS連携大学院の設置に向けた検討と、相互の特別講義・講演の実施

式典では、宝野和博 NIMS 理事長および湊 長博 総長がそれぞれ挨拶を行い、本協定が次世代の若手人材育成の原動力となり、日本の学術・科学技術基盤の強化に向けた大きな一歩となることへの期待を述べました。続いて、北川 進 理事・副学長、高等研究院特別教授より、具体的な連携事項や期待される相乗効果について説明が行われた後、両代表が協定書に署名し、交換を行いました。

本協定を通じて、本学とNIMSは、物質・材料科学分野における研究交流をさらに深化させるとともに、次世代を担う研究人材の育成や新たな学術的・社会的価値の創出に向けて連携を進めていきます。



協定に署名する湊総長と宝野理事長



列席の関係者：左から、北川 宏 理事補、北川 理事・副学長、湊 総長、宝野 理事長、竹内正之 NIMS 理事、長野裕子 同理事長特別補佐

（総合研究推進本部）

[目次に戻る](#)

パナソニックハウジングソリューションズ株式会社から洋式便器を寄贈

本学は、パナソニックハウジングソリューションズ株式会社より、洋式便器（アラウーノ）25台の寄贈を受けました。

本寄贈は、小川理子 パナソニック ホールディングス株式会社執行役員に、本学の教育研究環境整備についてご理解いただいたことから実現したもので、学生や教職員がより衛生的で快

大学の
動き

適なキャンパスライフを送るための福利厚生充実の寄与するものとなります。

2026年6月4日(木)に本学において贈呈式を執り行い、小川執行役員から寄付目録が、湊 長博 総長からは感謝状が贈呈されました。式には、本学の状況をくみ、寄贈の仲介にご協力いただいた町田智子 文字・活字文化推進機構専務理事(京都大学経営協議会学外委員)、および稲垣恭子 理事・副学長も同席し、本学の取り組みについて意見交換が行われ、今後の連携強化に向けて前向きな対話が交わされました。

その後、一同は洋式便器が設置された薬学部構内共同棟を視察しました。寄贈を受けた便器は、近年の女性研究者や留学生の増加に対応したインクルーシブトイレの一部として導入されており、担当者からは利用者から好評を得ていることが説明されました。視察は終始和やかな雰囲気の中で行われました。



左から、稲垣理事・副学長、湊総長、小川執行役員、町田専務理事



感謝状を手に笑顔を見せる小川執行役員と湊総長



共同棟を視察する、稲垣理事・副学長、小川執行役員、新しく整備されたインクルーシブトイレ 町田専務理事



(DEIB 推進室)

[目次に戻る](#)

公開講座 京大知の森(令和8年度春季)を開催

公開講座 京大知の森(令和8年度春季)を2026年4月19日(日)、百周年時計台記念館にて開催しました。

京大知の森は、京都大学の知を広く学内外の人々に向けて発信するため開催している公開講座です。多様な研究分野を持つ本学の「知の森」に、研究者の手引きのもと、講演や討論を通して分け入り、研究の面白さや意義をお伝えすることを目的としています。

第6回となる今回は、「AI時代の『知性』と『衝動』-京都大学でどう学ぶか」を全体テーマに、

大学の
動き

AIが瞬時に答えを出す時代において、効率や他者の正解に依存せず、内発的な原動力としての好奇心や「問い」の磨き方を問い直す内容として開催しました。本学卒業生であり若手哲学者の谷川嘉浩 京都市立芸術大学講師（人間・環境学研究科・2020年修了）および、塩瀬隆之 総合博物館教授、理事補（広報担当）の2名を講師として、講演および対談を実施しました。

谷川講師は、現代社会で強調される主体性やモチベーションが、実際は周囲の期待や一元的な指標に沿うための概念になっていると指摘し、自覚的な意志に先立つ深い欲望としての「衝動」に焦点を当て講演しました。そのうえで、社会で求められる「やりたいこと」を自己の内面で探るのではなく、外部との相互作用の中で生じる小さな衝動を言語化し、環境を変えることで自己を変容させていくことの重要性を紹介しました。続いて、塩瀬教授は、大阪・関西万博日本館や本学のノーベル賞受賞者の研究展示を例に、生成AIとの付き合い方や、好奇心と卓越した研究の例について講演しました。また、不可能と思われた壁を超える知が生まれた背景には、個人の資質だけでなくその探究を加速させる「場」の存在があると指摘し、こうした知を育む本学の「自由の学風」や環境の在り方を紹介しました。

講演後の対談では、オンライン質問ツールやイラストのライブ描写によるグラフィックレコーディングを交えた進行のもと、参加者からの質問や質問に対する講師の見解など活発な対話が展開されました。現代人が答えを急ぐ短期的な問いにとらわれる現状を分析しつつ、探究や、大学と「独学」のあり方などについて、各講師の視点からさまざまな議論が行われました。

今回は、申し込み多数により会場を拡大し、抽選の結果、546名の参加がありました。参加者からは、「現行のキャリア教育への違和感がよく言語化されていた」、「純粹に分からないことを考える、自分の世界が広がっていく感覚を思い出した」といった感想が寄せられました。また、中高生や、親子での参加者も多く、「高校生の子にとっても、今の学校教育とは異なる新たな視点を持つきっかけになった。とても有意義な時間だった」とのコメントもあり、世代を超えて探究の本質を問い直す刺激の場となりました。



講演する谷川講師



講演する塩瀬教授



対談・質疑応答の様子



描画されたグラフィックレコーディングを見る参加者
(成長戦略本部)

[目次に戻る](#)

大学の
動き

第6回現役留学生と卒業留学生が繋がる会「教えて先輩！卒業後の進路、そのリアル」を開催

本学では、昨年度より、世代を超えた留学生間のネットワーク構築の支援を目的として、各国・地域留学生団体との共催により、現役留学生（後輩）と卒業留学生（先輩）がつながるイベントシリーズ「教えて先輩！卒業後の進路、そのリアル」を展開しています。

第6回となる今回は、京都インドネシア留学生協会（以下、PPI Kyoto）との共催で、2026年5月29日（金）に国際科学イノベーション棟内linkhub@で開催しました。当日は、日本で活躍する卒業留学生2名を登壇者に迎え、本学の学部生、大学院生、研究生のほか、他大学生を含む留学生等37名が参加しました。

冒頭の成長戦略本部ソーシャルリレーションズ領域担当者による趣旨紹介に続き、PPI Kyoto会長のNaomi Hasian Feliciaさん（農学部・4回生）より、同会の紹介と登壇者への謝意が述べられました。

第1部のトークセッションでは、Eko Heru Prasetyo 東京科学大学助教（経済学研究科・2022年修了）と、ウーブン・バイ・トヨタ株式会社に勤務するHeldira Larashati氏（経済学研究科・2018年修了）が登壇し、就職活動やキャリアパスにおける実体験が語られました。続くミニパネルディスカッションでは、PPI KyotoのAdi Musyaffa Abhinayaさん（工学部・2回生）の進行のもと、研究者・企業人それぞれの進路選択における考え方などをめぐり、参加者との間で活発なやり取りが行われました。

第2部のネットワーキングセッションでは、PPI KyotoのOphelia Faira Nahlaさん（教育学部・2回生）の挨拶に続き、参加者が2グループに分かれて対話を深めました。最後は会場全体で学びや気づきを共有し、イベントは和やかな雰囲気うちに終了しました。



トークセッションに登壇する Eko 助教



トークセッションに登壇する Heldira 氏



トークセッションの様子



ネットワーキングセッションの様子

大学の
動き



集合写真

参加した留学生からは、「先輩との対話を通じて将来のキャリアに対する視野が広がった」という声が聞かれるなど、参加者にとって、本イベントが卒業留学生と現役留学生がつながることの重要性をあらためて実感する機会となりました。

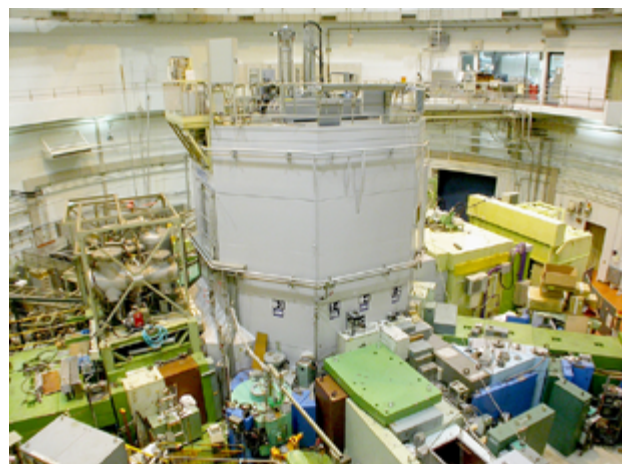
(成長戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)



京都大学研究用原子炉 (KUR) 運転終了、62 年の歴史に幕

京都大学研究用原子炉 (KUR) は、日本における大学研究炉の先駆けとして、大阪府泉南郡熊取町にある原子炉実験所 (現・複合原子力科学研究所) に設置され、京都大学にとどまらず全国の大学・研究機関に開かれた「共同利用施設」として、物理学、化学、生物学、工学、農学、医学など多様な分野の実験研究および人材育成に供されてきました。1964 年 6 月に初臨界を達成して以来、高濃縮燃料から低濃縮



KUR 炉室全体の様子

燃料への転換や、福島第一原子力発電所事故を受けて導入された新規制基準への対応のための休止期間を経ながら、約 62 年間にわたり安全かつ安定した運転実績を積み重ねてきましたが、2026 年 4 月 23 日をもって利用運転を終了しました。利用運転を終了することになった理由としては、核セキュリティを含む原子力規制の一層の強化が進むとともに、施設の高経年化により維持管理のための負担が増加していること、さらに KUR 使用済燃料を米国に引き取ってもらうための使用期限が 2026 年 5 月に迫っていたことが挙げられます。運転最終日にはこれまで KUR の運転管理に携わった元所員の方々をお招きし、施設見学会と意見交換会が催されました。施設見学会では見学者の皆さまにチェレンコフ光と呼ばれる青白い光が燃料から発せられる様子を炉頂から肉眼でご覧いただき、最後の運転のひと時に立ち会っていただきました。

KUR は最大熱出力 5MW を有する研究用原子炉であり、試験研究の用に供する原子炉としては中出力炉というカテゴリーに属し、大学が保有するものとしては国内最大級の規模になります。原子炉の型式としては「スイミングプールタンク型」と呼ばれ、濃縮ウランを燃料とし軽水を減速冷却材とする原子炉です。研究炉の目的は発電ではなく、核分裂反応によって発生する中性子を研究に用いることにあります。放射化分析、中性子イメージングなどの放射線を利用した基礎研究、さらには、がん治療法であるホウ素中性子捕捉療法 (BNCT) の世界初の社会実装を実現するなど、多くの優れた研究成果を生み出してきました。このように KUR は原子力研究のみならず放射線を利用した裾野分野の応用研究の発展にも貢献し、異なる分野の研究者が交流し新たな発想を得るための研究拠点として大きな役割を果たしてきました。



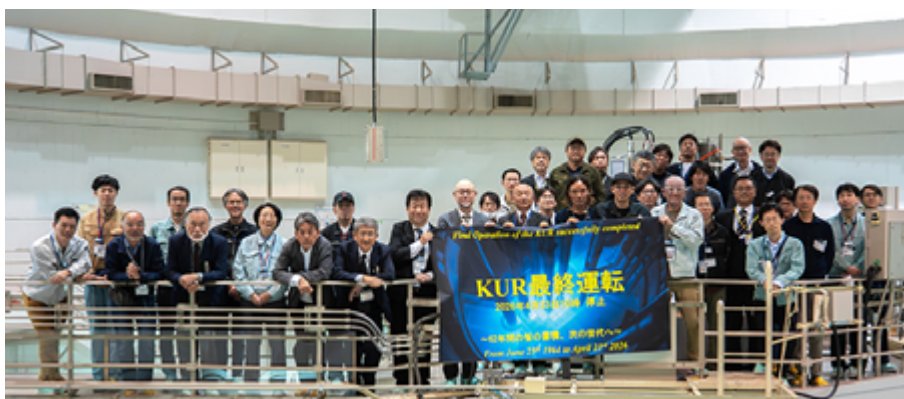
炉頂から見たチェレンコフ光の様子



KUR 運転中の制御室の様子

部局の
動き

今後は安全を最優先にしてKURの廃止措置を着実に進めるとともに、熊取キャンパスにあるもう1基の原子炉である京都大学臨界集合体実験装置（KUCA）や各種加速器、ホットラボラトリなどの既存施設を最大限に活用し、KURが育んだ複合原子力研究をますます発展させるべく取り組んでまいります。



運転最終日に撮影した関係者の集合写真

（複合原子力科学研究所）

[目次に戻る ↗](#)

医学研究科附属がん免疫総合研究センターが「がん免疫研究の最前線に触れる“未来のノーベル賞研究者を育む科学探究プログラム”」を開始

医学研究科附属がん免疫総合研究センター（CCII）は、株式会社日本旅行と連携し、全国の中高生を対象とした「がん免疫研究の最前線に触れる“未来のノーベル賞研究者を育む科学探究プログラム”」を2026年度秋季より開始します。

本プログラムは、ノーベル賞受賞者である本庶 佑 同センター長、高等研究院特別教授による講義動画の視聴、日本初のがん免疫研究拠点であるCCII研究現場の見学、大学院生との交流やグループワークを通じて、参加者に世界最先端の科学研究に触れる機会を提供します。また、総合博物館や附属図書館などのキャンパス見学も実施し、中高生らが本学の自由な学風や研究文化を体感できる構成となっています。

本取り組みは、京都の歴史・文化に触れる従来の教育旅行の価値に、本学が有する最先端の学術・研究資源を融合させた新たな探究型プログラムであり、次世代の科学人材育成と京都の教育的価値向上への貢献を目指します。



がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟にて大学での学びに触れる高校生たち

（大学院医学研究科）

[目次に戻る ↗](#)

寸言

京大卒の若手諸君、
真価を発揮せよ！

石田 健一郎



私の研究室は工学部金属系学科眞嶋研でした。眞嶋 宏先生はカナダの名門ブリティッシュコロンビア大学の教授職から京都大学に招かれた湿式精錬の権威であり、学会や企業から高い評価を得ておられた一方で、研究室員の面倒を家族のように見る人情味あふれる先生でした。2008年春の叙勲では瑞宝中綬章を受章されましたが、まさにそれに値する方だと全員が思いました。ご引退後も研究室の同窓会は大勢の参加者で賑わっていましたが、残念ながら2013年にご逝去されました。同窓会は今でも平藤哲司先生、土井俊哉先生に引き継がれ開催されています。

さて、私は1983年に卒業し、総合商社に入社。2013年に二輪用ヘルメットメーカーの(株)SHOEIに先輩から個人的に誘われ転職しました。眞嶋研卒業後30年経って製造業に従事し、冶金とは全く違う分野ですが、眞嶋先生に少し顔向けできた気持ちでした。2016年に社長を拝命し、その後の9年半で利益、時価総額ともに数倍、従業員給与は12期連続で、年平均4%以上のアップを達成できました。一部投資家さんからは、ヘルメットという労働集約型製品をMade In Japan、しかも同一労働同一賃金にこだわり、この業績を成し遂げたことはミラクルと有難いご評価をいただきました。結果を残している理由は、もちろん諸先輩からの遺産や役職員の尽力、ビジネスパートナー様のご支援なしには語れませんが、私なりにこだわった点がいくつかあります。ここではその中の2点をご紹介します。1つ目は「変革なくして成長なし」です。昭和時代は深夜残業がやる気の証しとされたこともありましたが、よく考えるとその企業は増員すべきところ、もしくは業務効率化すべきところをサボって個人の犠牲の上に経営しているブラック企業です。残業は一例ですが、企業も従業員も業務を量から質へ転換し、無駄を省き、新しいことにチャレンジし、ビジネスモデルに付加価値を与えなければなりません。入社後工場でのカイゼン会議に出席するようになりましたが、発表者が製造コストを1円でも下げ、品質を上げるために、昨日までのやり方を忖度なく見直している姿を見てまさに目から鱗が落ちる思いでした。工場では地元高校卒の若手が既に「創造的破壊」をやっているのです。2つ目は「遅滞なく決断する」です。優柔不断な上司を持った部下は悲劇です。部下は決断しない上司のために資料作成や不毛な会議に明け暮れることになり、職場にはしらけムードが漂います。とにかく次に進みましょう。仮に失敗しても新しい景色が見えます。

優秀で形にこだわらない京大卒の皆さんだからできることも多いと思います。皆さんの力で業務の付加価値を上げ、まずは皆さんの企業・組織、そして日本国を変えて行きましょう。

好きなようにやってみなはれ！

(いしだけんいちろう、株式会社 SHOEI 代表取締役社長、昭和 58 年工学部卒業)

[目次に戻る](#)

随 想

適正な動物実験の推進と
科学技術の発展

名誉教授 高田 昌彦



京大を定年退職して4年が過ぎた。正確に言うと、定年後も2年間、特任教授として勤務していたので、退職して2年である。専門分野は脳神経科学で、退職までの15年間、霊長類研究所（現、ヒト行動進化研究所）にお世話になった。大学院時代は医学研究科の解剖学教室（当時、高次脳形態学講座；水野 昇教授）で、ネコを使って大脳基底核（その障害によりパーキンソン病など、重篤な運動障害が発症する高次中枢）の神経回路に関する研究に明け暮れた。その後、海外ではげっ歯類（ラット、マウス）を使用し、帰国後は現役を終えるまでニホンザルなどのマカクや小型霊長類であるマーモセット（いわゆる非ヒト霊長類）を主な実験対象にしてさまざまな脳科学研究を展開してきた。幸いなことに、現在も大阪大学やスペイン・マドリッドにあるHM CINAC（神経科学総合研究センター）で招へい教授として、パーキンソン病の病態生理の解明と新規治療法の開発に関わる研究に参画する機会をいただいております、ここでも引き続き非ヒト霊長類を用いた実験研究を指導している。つまり、これまで約45年間にわたって動物実験に深く関与してきたことになる。人文社会系や理工系の先生方には縁遠いかもしれないが、生物系、特に医学生物学の研究にとって生身の動物を使った実験は欠かせない。

京大退職の少し前に、NPO法人動物実験関係者連絡協議会（以下、動連協）の理事長を仰せつかった。来年で設立20年を迎える動連協では、国際的な潮流を視野に入れつつ、わが国における適正な動物実験のより一層の推進を図ることによって、科学技術の発展と動物実験に対する理解の促進に寄与することを目的に、動物実験および実験動物に関係する諸団体と連携して地道な活動を展開している。わが国では、実験動物の福祉と科学技術の発展を両立させるため、2006年に構築された機関管理体制の下、大学、研究所、企業などにおいて動物実験が行われてきた。実験動物の福祉については、動物の愛護および管理に関する法律（以下、動愛法）の第41条に規定されている3Rs（Refinement, Reduction, Replacement）の原則に基づき、国内外においてさまざまな措置が講じられているところである。他方、科学技術の発展を目指して、動物実験に関わる各機関はさまざまな基準、指針、ガイドラインを踏まえ、組織的に機関管理を実施してきた。さらに、各機関による機関管理を実効的に担保するため、複数の学会・業界団体が協働して外部検証を自主的に実施してきた。動連協では、すべての機関で機関管理と外部検証が徹底されるよう、その普及・進展に尽力するとともに、通常5～6年ごとに行われる動愛法の改正に際しては、適切な改正がなされるよう、関係各方面に働きかけている。元来、実験動物の福祉の向上と動物実験の適正な推進は、密接不可分な行為であることから、一元的かつ包括的に検討されるべきものである。また、動物実験の適正化は、実験動物福祉の観点からだけでなく、高度に専門的な科学技術の視点からの対応も必要であり、さらには国際的な学術上の問題への対応も不可欠である。ピアレビューを基本にした国として統一的な管理体制が望まれる。

（たかだ まさひこ、令和4年退職、元霊長類研究所教授、専門は脳神経科学）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

線を引く

木村 里子

私にとっての研究は、ものごとを分けるところから始まる。

音を分け、種を分け、行動を分け、時間や季節を分ける。

例えば、検出した音は、スナメリのものなのか、ハセイルカのものなのか。あるいは、テッポウエビなのか、魚なのか、船なのか。音をただ聞くだけでなく、分けることで、海の中で起きていることが少しずつ見えてくる。

同じ種であっても、生息環境の違いによってどのように振る舞いが異なるのかを見分け、比較する。日本海に生息するミナミハンドウイルカの鳴音が、対馬と小浜で同じなのか、異なるのか。

そうした違いを見分け、比較することで、複雑な世界を理解し、他者と共有することができる。

しかし、たいていのものごとは、それほどきれいには分かれられない。分類や名付けは、世界を理解したり、制度を設計・運用したりするうえで欠かせないが、現実はずっと、その線引きより少し曖昧である。

例えば、ある年齢に達した瞬間に、人が急に変わるわけではない。社会にはさまざまな区切りが設けられているが、その多くは連続したものごとを便宜的に区分したものだ。大学教員の仕事も同じかもしれない。どこからどこまでが研究で、どこからがそれ以外なのか、明確に線を引くのは難しい。シャワーを浴びている最中、あるいはニュースを見ていたり家族と会話したりする中で研究のヒントを得ることもある。理系と文系、基礎と応用といった研究分野の区分も、必要ではあるが、現実にはその境界をまたいで営まれている。

こうしたことを私が強く意識するようになったのは、鯨類の研究に携わってきたからでもある。

ひとつは、鯨類をめぐる価値観の線引きである。国や地域が違えば、ある動物をどう見るかは大きく異なる。ある人にとっては特別な存在であっても、別の人にとってはそうではない。何を食べ、何を食べないかという判断も、科学的根拠だけで決まるものではなく、歴史や文化、感情が関わっている。そこでは、何が許容され、何が許容されないのかという境界がしばしば強く意識されるが、その根拠は必ずしも一様ではない。

もうひとつは、鯨類そのものの分類である。例えば、シャチは、世界中で1種とされてきたが、近年は遺伝や形態、行動の違いに基づいて、複数種として捉えるべきではないかという議論が進んでいる。分類は、自然界に最初から明瞭な線が引かれていることを意味しない。むしろ、人間が観察し、その時に使える最良の技術で比較し、議論を重ねながら、その都度もっとも妥当だと思われる境界を探しているということなのだろう。



洛 書

境界は、複雑な世界を理解しやすくするために必要である。しかし、その線の近くにあるものや、どちらとも言い切れないものに目を向けることが、新しい理解につながるのかもしれない。研究とは、線を引く営みであると同時に、その線を疑う営みでもある。

今日も私は、世界を分けるために線を引きながら、その線が本当に妥当なのかを考えている。

(きむら さとこ、東南アジア地域研究研究所准教授
専門は水中生物音響学、海棲哺乳類などの水圏大型動物)

[目次に戻る ↗](#)